
住・まちづくりフォーラム かわら片反 (仮題)

ニューズレター 第7号 1995年 6月2日



特集 第7回住教育フォーラム

○子どもの内面フィルムに投影された住まいと環境

発行／財団法人 住宅総合研究財団

7

■延藤 今日少し視点を基本的な所に戻して、子どもを取り巻く物的環境、および人間環境を含めての問題の深い様相を分析的に、でも単に実証的にとらえるだけではなく、その奥底に潜む理屈、あるいはそれを突き抜けていくような新しいものの見方に学びたいということで、野田先生をお招きしました。子どもの心に映された内面フィルムというキーワードをもって、具体的には写真投影法という手法を開発して、子どもと現代の環境との間に見え隠れする問題を、さまざまに深くえぐり出しておられる先生です。文化人類学と精神医学の間を自由に往還するという、非常に軽やかなフィールドワーカーであるとともに、自ら心に悩みを持つ人々への良き医師であり、かつ、さまざまな災害や避難地に赴いて、ドラスティックな精神の病をいやす、そのプロセスを解明しています。

今日の主題に関連する本としては『漂白される子供たち』という、世間で話題になった本の著者であり、最近では『喪の途上にて』という本が岩波から出されて話題になっていますし、併せて最近『庭園に死す』という、庭園のデザインの領域にまで足を延ばしておられるという、非常に幅の広い先生です。

子どもの内面フィルムに投影された 住まいと環境



野田正彰氏（京都造形芸術大学）

まとまった話ではなく、話題提供的な話を1時間ほどさせていただきたいと思います。私は評論家ですから、現状のレポートが主になります。

まず、子どもの問題を考えるときの視点ですが、核家族論についてお話をしたいと思います。戦後の日本社会は、あちこちで核家族になったので問題が多いという話があります。私たちの戦後社会が現代的な核家族、近代的な核家族を作ること成功したのかということです。私はとてもそうは思えません。倫理的な知見でいうと、核家族は決して近代のものではなくて、人類の歴史の大半は核家族できていますし、多くの未開社会も核家族が基本です。日本においても明治の後期ぐらいまでは、長男が20歳になるかならないかぐらいで隠居というシステムがあって、その中では核家族化の方向というのが、非常に強く進行していたわけで、日本が3世代一緒になってというのは、近代の富国強兵と産業化の中で、産むための手段に家族が変えられて、大家族が望ましいとする風潮が固定化されたように思います。戦後の核家族と言われているものは、核家族らしさを呈していない、とずっと感じておりました。

私が2年前にやった研究の紹介をしたいと思います。写真投影法のお話もいたします。

国語作文教育所の知人の塾に来ている子どもたちに、お父さんとかお母さんとか家族という指示語で作文を作ってもらいました。それから、各家の写真も撮ってもらいましたし、絵画の手法を使って、「何でも理想の家が造れるとしたら、どんな家に住みたいの」ということで絵を描いてもらいました。現在の家族の関係を多角的に

分析しました。

絵などで見ていて大変面白かったのは、いかに日本の家族は夫婦が単位になっていないかということ、まざまざと見せつけられました。理想の家というのを描いてもらうと、お父さんとお母さんが一緒に寝室などというのはほとんどなく、お母さんは台所の横に部屋を持っているという絵を描いてきました。

描いてきた子どもたちの作文を紹介しておきたいと思います。これはNHKの本になっています。身につまされる文章がたくさんありました。小学3年生の男の子が、「家族について」というので、こう書いてきました。「僕の中心は何だろう、と僕はたくさん考えたら、何と僕には中心がないと気が付いた」という書き出しです。「僕の家の中心は、食糧、テレビ、コタツなのだと思う。どうしてかという、ご飯前まではみんなバラバラだけど、ご飯になるとみんな寄ってくる。テレビの場合は、ご飯のあと、テレビをつけていると、みんなそのまま、テレビをつけないでいると自分の部屋に行ったり、お風呂に入ったりして、またバラバラになってしまうからだ。コタツの場合は、夏にはないけれど、帰ってくると、みんな砂糖を見つけた蟻みたいにコタツに入り込んでくる。だから、僕の家はまともなものでつながっていないのだと、僕はしみじみと思う」というのが「僕のお家」という文章です。

児童関係の人も言っていますが、子どもの大人化が進行してきたし、大人の子どもの大人化も進行しています。大人化というのは、大人社会の最たるもので、役割演技がうまくなっているということです。中学校2年生の男の子は、「子どもの演技、親の演技、お互いに満足、何だか

寂しい。こんな親子関係でいいのだろうか」と書いています。

中学1年生の男の子は、「家族の兄とか弟とか姉とか妹とか父とか母とかは、みんな役割だと思ふ。役割は終わるけれど、関係は終わらない。それは役割は親が子どもを育て終わって、立派に自立できるようになったら、その役割は終わると思う。しかし、いまの私たちは死ぬまで一生親に何から何まで世話をしてもらって、お金をもらっている。だから、親は死ぬまで親の役割であって、子どもは死ぬまで世話をしてもらおう子どもではないか」という考察をしております。

中学3年生の男の子は大変鋭い分析で、感心しました。「もちろん、俺にも家族はある。何だか知らぬがある。俺はいままで家族というものを考えたことなどなかった。なぜに俺はうちの親父の息子であり、うちのばばあの孫で、うちの姉様の憎らしい弟なのでしょう。俺はいっぱいいる。なぜだ。俺はそれぞれの俺を使い分けて見せているからだと思う。きつうち親父も母親もそうだと思う。大学の英語の先公としての親父、一応うちの主としての親父。幼稚園の先公としての母親、うちのばばあの娘としての母親などというように、きつみんなそうだと思う。そして他人に見せているんだと思う。そして他人のそれを自分が見て確認しているんだと思う。結局家族の中で、自分を見せ合い、納得させて、家族を確認しているだけだと思う。家族の必要性はないのではないのでしょうか。いまいよくわからない。おままごのように家族ごっこをしていて、親父と母親が金稼いでいて、飯食って、学校行って、作文研へ行って、デートしたりと、やっぱり自分が全然わかっていないんで、全然わからん。ところで、『家族は必要ない』と断言して、『みんなバラバラになろう』って言った場合、俺なんか真っ先に困ると思う。つまり、金だ。何だかんだって俺は甘えん坊だし、まだまだ親父のスネにかじりついて、親父のふくらはぎに歯型がつくぐらいかじりついている。家族に俺がくっ付いているのは、経済的なことがあるからだなど考えるけど、どうなのでしょう。むなしい家族だと思ふが」という文章です。見事な文章だと思いませんか。

ここに書かれているのは、現代の子どもは非常に都市化の方向であり、情報化の方向なのでしょう。役割関係として家族関係をとらえるのは非常に巧みです。つまり、子どもというのは、ピアジェの『自己中心者』ではありませんが、もう少し相手に自分を出して、その衝突の中で人間関係を作っていく時期にあると思うのですが、非常に小さいときから相互の役割をとらえ、相対的な関係として人間を見ることが巧みになっています。そういう意味では、家族について、全部きちんと、お父さんはこれこれの会社へ行って、こういうタイプの人である。お母さんはそれに対してこれこれで、そういうお父さんとのように付き合っている。そして姉さんはどうで、それに対して私はどうと、きちんと相互の関係性をとらえることができているわけです。これは文化が素質付けされているということなのでしょうが、こんなに小さい子どもが、このぐらい相対化しているのだろうかというのが、いま読んでいたらわかると思います。そこでは自分がかかわりを持って何かを作っているという関係ではありません。システムを最初からどうやって維持していくのかという視点でものを考えていることが、よく作文の中に現れています。

そういう意味で特殊出生率がどうなると、すぐ核家族

は悪いと言われていますが、こういった文章を通して見る限り、私が思うことは、これは核家族ではないということ。バラバラになった家族が、経済の単位として動いているとしか言いようがないわけです。そして、私だけではなく、多くの人を指摘しながら、何も変わらずにきたというのが現状ではないかと思えます。

戦後急速に西洋文明への移行が行われて、人口政策がうまくいったわけですが、明治後半、とりわけ昭和になって産めよ増やせよで、家族というのを人間を増殖するためのシステムとして考え、それが戦後一定程度批判されて挫折した。しかし、経済の方向は産業戦士を作るために、植民地がなくなったからということできて、一方では、農村から東京に出てきた人たちが、恋愛をして、郊外の家を造って住むようになっていったわけです。そこでは生涯を通して大人の男と女が、自分の人生を語り合っていくような関係としての家族を作っていく、ということも考えてこなかった結果が、これだという気がします。そういう意味では、結婚して第1子のころは写真をいろいろ撮って、アルバムを作りますが、2子目になったら写真がすごく少なくなって、そのころはお父さんは会社人間でサラリーマンを一生懸命やっている。お母さんはそのうちに、お父さんのようになるなと思ったか、なってほしいと思ったかわかりませんが、子どものお尻を叩いて教育ママになっていく。男性は会社人間としての方向、女性も育児ビジネスの方向。そういう意味では、家族というのは、いわば家族ビジネスをやってきたわけで、そういったことが子どもの目を通じて、非常に見事に描かれているのが、1980～1990年代の子どもたちの文章になったのだらうと思います。そういったことは後の写真の中でも、いろいろ感じられると思います。

次に、空間の問題をお話したいと思います。子どもたちの生活の中では、空間よりも、時間がなくなっているということのほうが大きいのではないかと考えています。空間については、日本の場合、歴史性がある、都市に農村から出てきた人たちが、結婚して、一戸建ての家を持つとして、果てしなく一戸建を建て、それが限度にきたら、今度はちょっとした集合化の方向に動き、いまは集合化の巻き返しの状況がずっときているわけです。

そういった動きの中では、私的な空間と行政空間だけの峻別が、子どもたちの側から見るとでき上がっていったと言えると思います。つまり、空間というのは、現代の日本のような社会ではない所に行けば、もっともっと私的な空間と公的な空間の間に、非常に曖昧な私的でもない公的でもない、つまり、ある程度自分が能動性を持って、その空間にかかわることができるような空間を持っていたわけです。例えば、京都のような町だったら、路地は行政の空間でもありませんし、私的な空間でもなくて、その区域の子どもたちとか、おばさん、おじさんがレベルに応じて管理し使う空間であるわけです。そのため各家はちょっとした家を建てても、一定程度窪みを作って、その窪みには季節の花を生けておいて、周りの人たちに、「私の家族はこんな家族ですよ」ということをメッセージする、いわば中間的なゾーンがたくさんあったわけです。

東京に私が来て感じるのは、曖昧な中間的な空間がどこにもありません。1970年代にできた東京の郊外の成増などの団地に行くと、徹底して私的な空間がパシッとあって、扉を1歩出ると行政空間になっていくのです。



鉄の扉を出るときには無意識ですが、必ず人はこの扉を開けると何が起こってもいいと身構えてから出ていくのだらうと思いました。

子どもたちには小さいときから常に私的な空間と、それ以外の外の行政的な空間ということで、間がない。そう

なると、必然的に子どもたちの精神的世界が内側に向かうわけです。外が一定の緊張を要求するというですと、内側の空間の中に内閉化しようとしていく傾向は必ず出てくるわけです。

いま進んでいる高層化などはその最たるものです。外の空間が私たちの精神をどう構成しているか、という問題は非常に大きいと思います。例えば、中央アジアのような所で育った人たちというのは、広大な盆地の空間がないモスクワみたいな都市に行くと、すごい圧迫感を訴えるわけです。私たちは日頃はそれほど思っていないのですが、景観によって自分の精神が構成されていく面は非常に強いと思います。小さいときに、いろいろな形で学習をします。日本人にとっての理想の空間、広重の絵のような近世になって作られた理想的な日本の景観などは、イメージとしても学習もします。親に連れられたり、小学校の遠足に行ったりしていわゆる日本的絶景を学習して、そこで自分の学習した1つの文化として切り取った景色に応じて、外の景色をとらえ、それに合うものを認知することは日頃やっていると思います。

同時に、その人が意図しなくても、都市がさまざまな形でフレームされている空間を、今度は無意識のうちに自分の中に取り入れるといった相互の作用を、いつものながら生きているのだらうと思います。それは私たちの対人関係を通して作られている精神と同じぐらいの比率で、外の世界が私たちの精神を規定している面というのが大きいと思います。そういった目で見ていると、だんだん曖昧な空間がなくなっていくこと。それからとりわけ現在進行している高層化。新宿の副都心などに住んでいる子どもたちを見ると、よく言われることですが、人間にとって歩いていい外界の空間というのは、農大の進士さんがずっと言ってきたわけですが、仰ぎ見る角度が、視線を上げて5度ぐらいです。そしてちょっと下がった風景は1度ぐらいです。5度と1度の空間で視野が上がったり下がったりするのです。この範囲で物を見ることは、私たちには非常に快感なのです。借景の庭園などの構成が大体そういう形でできています。目がちょっと上がって下りるような景色は、私には快いわけですが、新宿の副都心みたいな所では、徐々に空が覆われて5度上げても空が見えない世界が作られています。

そうなる、何が起こるのでしょうか。当然人は遠くの物を見ることをあきらめると思います。だから視線を遠くのものに合わせることはやめて、ちょっと離れたものを、ぶつかるかぶつからないかという形だけで認知して歩いていくようになると思います。そして、その代わり、自分の身近な閉ざされた内面の世界の中で、非常に居心地のいい世界を作ろうという努力をし始めると思います。子どもたちが盛んに自分の個室をきれいに飾り始めています。1970年後半ぐらいから、子どもが部屋を持つことができるようになりました。それは親の育児ビジネス、

リクルート・ビジネスの結果ですが、そういった中で、子どもが部屋を持ち、子ども部屋の中に、非常に充足された内的な空間を構成し始めたのが、1980年代の傾向だらうと思います。子どもたちにカメラを渡して、「何でもいから、好きなものを撮ってきてください」というと、自分の部屋を丹念に撮ってくる子どもが圧倒的に多いのです。

撮ってくる写真はいろいろ象徴的ですが、まず非常に多く目立つのは、天井の照明器具をきっちり撮ってきたりします。それから壁の周りに貼ってあるアイドルのポスターや、ぬいぐるみをいくつかアレンジして撮ってきます。その一連の写真を見ていると、「ああ、この子にとって自分の部屋というのは、1つの充足した世界なのだ」ということがわかるわけです。都会の子どもたちは自分の部屋の写真から外に行かないのです。外の景色を撮るかと思うと、窓から遠くの景色を撮る傾向があって、実際になかなか外に出ていきません。これは「下町」とか「熟した社会」と私が呼んでいる所の子どもと非常に違う傾向です。彼らが外へ出て行って、自分が寄り道をしたりする所を撮ってくるのに比べて、自分の室内をきちんと、しかもいかに飾って、アレンジしているのかを丹念に撮ってくる傾向というのは、非常に強く感じます。

前にいた神戸市外国語大学では、20歳代後半から40歳代の助教授とか若い先生の所へ行くと、教室もちゃんとサッカーのボールをきれいに止めてあったり、ラケットがきれいにピンで止めてあったりします。室内の内的な充足化とか、ぬいぐるみを置いてなどというのは30~40歳代の人たちの傾向ではないかと思っています。

高層化がずっと進行していくと、人間の外界認識はすごく変わっていくのだらうと思っています。年配の人たちの空間認識というのは、水平面が非常に広がっていて、水平面で物を見ているときは、空間の認識は身体化されている面があって、「歩いてあそこまで行くと、どのぐらい疲れるかな」という感じで見ることができているわけです。しかし、垂直面で空間を見るような若い世代になると、ほとんど空間というのは身体化されておらず、疲労感とか歩く苦勞などは全然ないような話があります。つまり、それは、あそこに行ってアクセスしてエレベーターに乗ればいいわけです。エレベーターには身体的な疲労感はなく、瞬時に上がってくれるわけです。問題はそこに入ることが許されるかどうかです。入る権利がある人かない人か、という形で空間が見えているわけです。これはデータベースのアクセスと非常に似た、人間が電子になっていて、電子の粒として都市空間とのかかわりを持っている認識のあり方だと思います。パスワードが入ると、30何階には近付けるが、その扉の中に入っていくことはできないわけです。しかも、それは瞬時に到達できるわけです。極端な仮説ですが、そういった空間の認識に徐々に近付いていくのかなと思ったりします。

いま空間を云々言いましたが、私は主には時間のほうが問題だと思っています。子どもの生活、先ほどの役割意識は非常に強くなっていることを見てもそうですが、生まれてから全部現在の子どもたちは生き急いで学習ばかりをしているわけです。それこそ計画出産が行われたり、極端になると、幼児塾などが行われているわけです。私は幼児塾を1度見せてもらったことがあります。大変面白かったのです。ある有名な幼児塾で、私学の受験校ですが、ああいう学校へ行きたいというのは、上まで試験がないというか、早く権利を得たいというこ

とです。そういった学校の幼稚園の先生が、幼児塾のテストをやっているわけです。例えば、フライパンを見せて子どもに「これ、何、何に使うの」などと聞くわけです。そしたら、子どもが「フライパン、朝起きたら、お母さんが卵焼きを焼いてくれるの。そしてみんなで卵焼きを食べるの」というと、100点くれるわけです。採点の理由は、フライパンの用途を知っているだけではなく、この家族は、朝起きて一緒に卵焼きを食べる家族だ」ということで100点をもらえるのです。実際は違うのですが、そのように言う練習をちゃんとしているわけです。こういうことを3歳の子どもが練習しているわけです。これは1つの極端な例です。私たちの作っている社会の子どもの学習というのは、大人が社会で何を求めているのか。そしてそれにどのように適応して答を出したら評価されるのかという練習を、小さい時からずっとさせられているわけです。ドリルの試験をずっとやり、偏差値の試験をくぐり抜けていくということはそういうことだと思います。

そういう中では曖昧な時間は全部奪われてきたわけです。子どもたちは遊ぶにしても、ちゃんとアポイントメントをとらなければなかなか遊べなくなっていますし、アポイントメントをとろうにも空いた時間はほとんどない。周りに子どもがいないから塾に行かざるを得ない。塾に行くと、例えば、水泳教室などはたくさんありますが、そこでは水遊びができるわけではなくて、きちんとオーソドックスなクロールを教えられます。ですから、すべてのことは技術として習得されているわけで、人間関係を作っていくための1つの媒体として使うことができなくなっている。それは全部私たちの子どもたちの時間が切り取られてコマ切れになっていることだろうと思います。コマ切れになっている時間の中で、最大の快樂をもたらすものとして、ずっと登場していたのがテレビ・ウォッチであり、テレビゲームでありファミコンであったと言えます。非常にコマ切れの時間でも最大の快樂を提供するように大人たちが作った子どもサービスの市場経済化の中で、子どもたちがこれに適応しながら生きているということ強く感じます。

住居という問題は、結局そういう空間の中で、他者とどうかかわって生きていくかということです。だから、他人とのかかわりを豊かにするものとしての住居、あるいは景観であろうと思います。いま私が述べてきた方向は、他人とのかかわりを豊かにする方向ではなくて、他人とのかかわりを貧しくする方向にもものが自立していった時代であったと思うのです。皆さんがここで主張されているような、住居に対し1つの能動性を取り戻そうということは、人と人がかかわりができるといった環境に変えていく努力だろうと思います。

そこの中でもう1つ大きな問題は、衣服とか装うということだろうと思います。日本の子どもを見ていると、思春期になったら急にお洒落をするわけですが、そのお洒落というのは、バブルの時期はブランド物を持つことでしたし、それは減ったというよりはあまり変わっていません。例えば、20歳代のパリジェンヌと東京の山手の女性たちを40人ほど「好きなものを撮ってきてくれ」ということでやったことがあります。ロサンゼルススの若者にも同じことをしたことがあります。すると、日本の若い人たちは、全部ブランド物の商品をカーペットの上にきれいに並べて、念入りな人はスーツを広げて、手が当たる所にはプレスレットとか胸にはいくつもの装飾品、

ちゃんと足元には立派な靴も置いて写真を撮ったきたりするわけです。物にこだわりながらしか自分を表現できない人の姿を、非常に強く表していました。

例えば、アメリカのロサンゼルススの若者たちは、ジョークも含めてですが、好きなラケットを取るにしても、誰かと叩いているところの写真を撮ってきたり、お母さんのお尻を撮ってきたり、人間のタッチを非常に強く入れています。パリジェンヌたちが撮ってきた写真は、きちんと自分の生活はこのようにあるのだという主張を入れて、商品と自分の生活を撮ってきます。例えば、自分がよく捨てに行くゴミ箱を撮ってくるとか、散歩の道撮ってくる。それは自分の世界の主張を撮ってくるわけです。それに対して非常に印象的なのは、日本の20代の人たちが撮ってくるのは、商品をきちんと丹念に並べて、1つ1つそれを撮ってきたり、あるいは組み立てて撮ってくる傾向がありました。

面白かったのは、ある女性の写真ですが、男の子が花輪を持っている写真があったので、「なぜ、この人が好きなの」と問い合わせましたら、「この子は、学習院の小学校から大学まで行って、何とかの会社に行っている」と答えるわけです。「つまり、ブランド商品としての人間だというわけですね」と聞いたら、「まあ、そういうことです。」ということでした。人間もそういう形で写真を撮ってくるという傾向があります。

そういったものを見ながら、私はもっともっと小さい時から、自分の持っているものの中で、自分をどう装っていくのか、そして人がどう装っているのかに、ハッと気が付いて、それに目を止めるとか、そういった力とか能力というのは大事にしていくべきだろうと思います。そういう意味では、住居の中に自分をどう装い、他人がどう装っているのかに気が付いて、それを評価していく。そういったことは住を考えた場合に必要視点ではないだろうかと思っています。

写真投影法は、たまたま初期に子どもの調査をやると思って、写真機を渡して、好きな人、好きな景色、何でもいから撮ってきてください、ということを始めてみたわけです。そこで分析をするということでした。

私は臨床の精神科医でしたので、初期には絵画療法をいろいろやっていました。描いてもらった絵を通して、グループ精神療法をずっとやっていました。それから海外の調査へ行ったりする際、全体主義の国家とか、鎖国状態の国では、インタビューを許してもらえません。ブータンでは、子どもたちに「家族と家」というテーマで絵を描いてもらいました。そうすると、インドから入っ



▲当日配布された資料

てくる文化の変化が、山村から出てきた子どもと都市部の子どもで非常に違うのが明らかで、大変面白かったです。

ただ、絵というのは時間がかかりますから1枚描いてもらうのが精一杯で。これは写真でやったらどうかと思いました。都会の子どもたちや青年にやってもらっていますが、文化の比較に使う結構面白かったです。去年は、日本の老人ということで、全国の老人の30人強に好きなもので撮ってもらって、その写真と思い出のアルバムを使って、環境の変化を語ってもらいました。

写真の歴史というのは、いい写真を撮るということで、だんだん芸術写真の方向へ行っているわけですが、それをひっくり返して、いい写真を撮るのではなくて、その人が生きている内面の世界にどのように外の環境が取り入れられているのかを、写真を通してのぞき込んでみようという発想の転換なのです。そこで見えてきたものを話題提供のために紹介します。

例えば、都市の団地の子どもたちに撮ってきてもらった写真には、フェンス越しの写真が非常に多いです。全部格子が入っています。もちろん格子は単純な縦格子ではなくて、花飾りの格子とかいろいろありますが、すべて格子の内側から外の世界を撮らないといけない子どもが多いのです。これは閉まれたものから外をのぞかないと落ち着かないというあり方ではないだろうかと思えます。

私はいつもやっている方法では、フィルムを2本渡します。そしてウイークデーと祭日の2日間の日程表を書いてもらって、その日程表はあとでもらいます。そして写真を撮ってもらいます。「何でもいいから撮ってくれ」というと、いまの子どもは「何を撮ったらいいの」とか、「こんなものを撮るのか」とかしつこく質問してきます。一切答えず、「とにかく好きなものを何でもいいから撮ってくれ」と言います。

そういう中で都会の子どもたちは、テレビを延々と撮ってくる子どもが非常に多いのです。それから照明に非常にこだわる傾向があります。小さい子どもがお絵描きを始めたときに、太陽の絵をすごく描きます。不安な状況になって分裂病などでも太陽の絵はよく出てきます。いまの子どもたちで面白いのは、縦の照明はあまり撮らずに丸い照明を何枚も撮ってきますから、かなり意味があるのだらうと思えます。それから圧倒的にぬいぐるみが多いということです。これは男女ともに共通しています。

自分の生活の物語を写真に構成できる子どもは少ないのです。こうこう連続しているなという感じが少ない。それが多いのはやはり熟した社会です。東京などでも下町の子どもたちなどです。京都の子どもなどでも全然違います。京都はあまり勉強しなくてもいいのです。この間、平安建都で子どもたちに景観の分析をさせようと思って、100人ほどでやったのです。京都の子どもは悪くないなと思ったのですが、ほかの町と全然違って、見事に道草しながらの回遊域があるのです。東山地域の子は、東山の家のほうからブラブラと東山の坂のほうに下り、賀茂川に下りて、また帰ってくる写真です。その中で寄るラジコンショップとか、お茶屋さんとか、石のたたずまいとか、いろいろ撮ってきておりました。もちろん家の写真もあります。左京のほうの子どもは左京の区域から出町柳のほうに出てくる。つまり賀茂川に全部が出てくるような回遊線が出てきます。北区の子どももそうです。そういう意味では、大阪の子どもとか神戸の

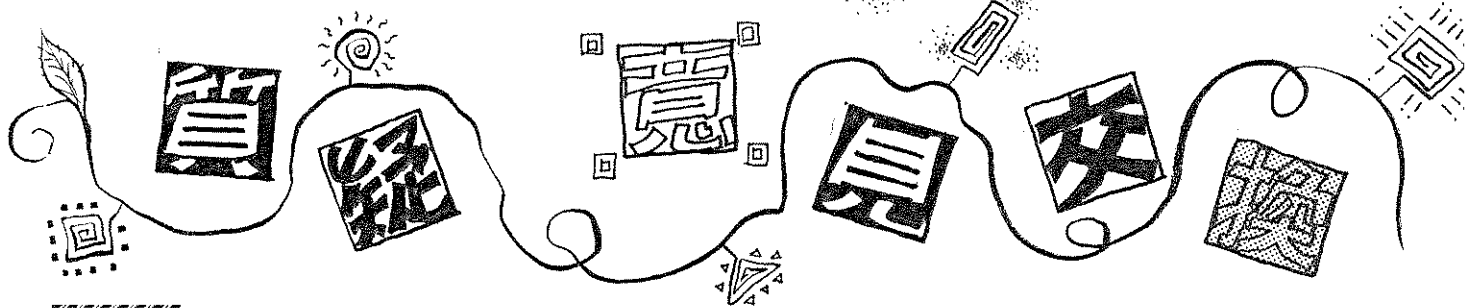
子どもには全然ない傾向で、よく道草する道がある町だなと思いました。

これは東京でも、隅田川のほうの下町の子どもには同じ傾向があります。新興住宅地の子どもはほとんど動がず、家の中の写真だけ撮ってきます。大阪などでもそうでした。京都などでも新しい住宅地のマンションなどの子どもは、室内の写真をずっと撮ってきて、主張がありません。新しい地域では行動している人間の写真がなく、物が中心にいくように思います。

これは日本国内における都市の新しい住宅地と、熟した社会との関係ですが、それは海外との関係においても同じことを感じます。モスクワの青年たちの写真に感動しました。日本の20歳代はこんな写真を撮ってこないなと思ったのです。生活はもちろんそんなに豊かではありませんが、1990年に森の写真とか恋人と歩いている写真などを、写真が撮り切れないという感じで撮ってきたのです。パリジェヌが撮ってきた写真でも、自分の生活の主張をしている。それに比べ、商品によって生活を非常に飾っている傾向を日本人の若者に強く感じます。

先ほど京都の子どものことを話しましたが、このごろの子どもは、とにかく道草をしなくなっています。行動線が硬化しているとか、血管が動脈硬化するように動く範囲も硬化しています。家と最寄りの駅と、そこまで到達するまでの道、ちょっと寄る食物のお店と、あとは学校という傾向があります。これは都会だけではなく、農村の子どもでも同じです。農村の子どもといっても、集団登校でヘルメットをかぶって、自転車で学校へ行く道、その道には寄り道するものは何もありません。真っ直ぐ田んぼが連なっている。そして海辺の子どもでも海辺は全部大きな岸壁で作られていて、テトラポットが置いてあって、アクセス不能です。そういう意味では、農村の子どもといえども、自分たちの好きな場所というのは、放課後の校庭で遊んでいる写真が何枚か撮られるだけという状況があります。私が宮城でやったときには、県の委託でしたので、議会の議員さんたちなどに発表しました。そのときに彼らに執拗に言ったのは、「皆さんは東京と違って、宮城は緑が多くて豊かだなどと言っているが、嘘っぱちだということは、これでよくわかるでしょう。」という話です。「皆さんが言っている緑というのは、大人の思い込みであって、子どもたちが生きている世界には何の緑もありません」と話したことがあります。また農村の子どもに聞くと、朝から晩まで日曜日もトレーニングウェアでいます。それも宮城で言いました。「皆さんは伊達な国づくりを言っているが、朝、昼、晩も休みの日もトレーニングウェアでいる子どもは、成人すると急に伊達になるのでしょうか」とからかいました。子どもの世界というのは、撮ってきた写真を見ると、非常に面白く語ります。





伊藤隆雄（東京電機大学）：現代の子どもに関する種々の問題は、子どもたちの住んでいる地域の持つ風潮や雰囲気によるものである、という印象を受けました。生活システムや社会システムの問題だとすれば、ハードとしての住まい（建物）は、意味がないように思われますが、その辺りを先生がどう考えておられるのかお聞きしたい。

野田：ご指摘のとおり、確かに今の生活環境とか、子どもたちの成長の過程で作られているシステムを変えないで、建物のアプローチで子どもたちの世界を変えるというのは、ひとひねりした発想で面白いと思いますが、それは大変なことだろうと思います。やはり現在の生活で一番大きなイベントは、最終的な学校への入学が行われたか行われぬか、ということになっています。高校生位で、もう40%から50%近い子どもたちが、自分の人生は失敗だったと思っている、という数字が出ています。やはり、大学の試験なんていうのはないほうが良いと思います。そうしたら、どんなに日本の社会は変わるだろうかと思えます。試験がなく、それなりに教育を受ける機会があって、その中で自分たちが勉強していくということが、どうしても今の社会が変わっていく方向として必要だと思います。今のうちに、小さいときから前もって資格を得る、パスを得るという姿勢でやっている日本の場合、非常に思春期の自立のプロセスが奪われています。親の言うことを聞いていかない限り生きていくことができない。住居がないし、また高等教育を受けられなくなるから家から出て行くことができない。そういう形で縛りがかかってきたから、結局、全然反抗期のない子どもができて上がる。自分なりに失敗したりするチャンスが奪われています。

種岡淳一（都市計画同人）：曖昧な空間の欠落と子ども（私は子どもだけではないと思うけれど）の主張の欠落とが関係あると考えられておられるのか。もし関係があるとと思われるなら、どのような流れでそう結びついていくのか話してほしい。

野田：曖昧な空間がないとか、曖昧な時間がないということは、自分を表現することができなくなっていることと密接な関係があると思います。例えば、空間の問題をとっても、私的な世界というのは果てしなく強迫的に、自分にとって居心地の良い空間に作り替えていくことができるわけです。しかし、1歩外に出ると、管理する主体は行政にあって、自分は能動的に一切かかわれないわけで、もう発言はできないし、必要もないわけです。だから中間的な世界で人とかがかわる。子どもたちが遊べなくなっている問題は、遊ぶというのは、ルールを提案し

て一緒に作って、その中に人を巻き込んで、いろいろ失敗したりすることを繰り返すことだろうと思うのですが、今子どもたちの遊びを見ていると、野球でも全部親が入って、きちっとした野球をやっているわけです。だけど普通、子どもはちょっとちょっとルールを変えたりして、こうやったら面白いぞとか、その中でルールをめぐってのインターアクションをいろいろ行ないながら、結果としては子どもたちの社会を作る練習をしているわけです。一方で、大人が作った正当性をなぞするという関係になると、能動性というのは全部奪われていくわけです。そういう意味では、曖昧な空間がないということは、時間においても空間においても、自分が参与できる世界を縮めてしまっているということと密接な関係がある、と思います。

林悦子（東京学芸大学）：撮影された写真について、都会の子、農村の子、下町の子、郊外団地の子など、それぞれの居住地によって特に好まれた景観について、各特徴がありましたらお教え願いたいと思います。

菊池健司（東京電機大学）：ゲーム機の進化などが、余計に子どもたちを家の中に閉じこめてしまったのは確かですが、都会と田舎の環境の違いが、一番関係しているのではないのでしょうか。

野田：都会と田舎という分類は、あまり有効でないと僕は思っています。「私はこういうふうにいるよ」と語りかけが感じられる写真というのは、地域で言いますと比較的熟した下町の子どもたちの写真がまずそうです。田舎といっても、いわゆる山村の子どもがそうです。農村と山の境で言えば上のほうです。あまり園場も道路もそんなに整備されてない。子どもたちはお父さん、お母さんと一緒にシイタケをとりに行ったり、川で遊んだりしている所です。だけど、一般に言われている田舎、たんぼがビシッとある所とか、きちっと整った魚村なんかに行くと、都会の子どもも以上に室内ばかりしか撮ってこない。つまり、1歩外へ出ても何も無い、都会以上はないんです。今は整備されて道はきれいになって、街の高台みたいな所に学校がポンとあって、そこに通うだけ、学校から帰って来たらテレビを見る生活、ゲームをやる。田舎の大人たちが、都会と同じように生活しているのと同じなんです。閉ざされている傾向が見られるのは、高層住宅の団地の子どもと、新しい住宅地の子どもたちの写真です。中間に都市の商店街とか、そういう所の子どもたちが入るような感じがします。

その街がある程度熟しているかどうかを調べるのに僕がよく使うのは、駅の前で道を聞くのです。その街のちょっとした標識になるような建物を何人かの人に聞いてみるのです。それに答えられるかどうかなんですが、東





京の新しい街並みでは、ほとんどの人が答えられないんです。自分の家から駅までの道しか関心がない。そこにあるいくつかのコンビニぐらい、区役所なんか聞いても全然わからない。だけど、古い街、熟した街に行けば、聞いたら必ず教えてくれます。

寺本 潔（愛知教育大学）：私も子どもにカメラを渡して調査しましたが、異様にペット、犬、猫のフォトと、マンションからの俯瞰景が多い写真には驚いています。先生ならこれをどう分析されますか。

野田：同じものをたくさん撮ってくる子は、写すものがないということなのでしょうね。高層住宅に住んでいる子どもは、全然下に降りてないというのがよくわかります。1カ所から同じ所ばかり撮ってきます。それは、住宅に関係すると思います。いかにアクセスしにくい環境を私たちは提供しているかでしょう。やはり高層化していくと、母子関係がどうしても密着してしまう。「リモコンの子どもたち」と名付けていますが、小さい空間で、まなざしで、言語以前のレベルで会話ができているわけです。非常に閉ざされた空間で、一定の人と濃密な関係をとれば、外には行かないし、かつ言葉も要らない。自己の表現をきちっとしなくても、ちょっとした合図で相手は察知してくれる。そういった関係を常にとっているということなのでしょう。それは、写真を見ていても、狭い空間で生きているなということが、ひしひしと伝わってきます。

高橋佳代子（マルモ・プランニング）：これからの景観づくりは、人と人がよりよくコミュニケーションできる舞台として考えていくことが重要になるのですが、まず何を手掛かりにしていっていいと思われませんか。

小島隆矢（東京大学）：市民の皆様には景観を写真に撮ってもらい、コメント（キャプション）とともに提出してもらおう。キャプションを我々が分析するとともに、写真とキャプションをワークショップのネタにする、ということをやっています。自分たちの街の良い所を、むしろ能動的に発見しようという使い方をしています。

野田：日本の街で「あなたの景観は」といって撮ってもらって差異が出るほど景観は違うだろうか、という疑問はあります。全部もうゴチャゴチャと家が建っていて、広告が多い。考えてみたら、やはり70年代の末から日本の都市というのは、ほとんど全部が均質化されていっているわけですから、景観を撮ってもらおうと、いかに均質化されているかということ、商店街もほとんど原宿の通

りみたいになっている、ということを感じてひしひしと感じることに終わるかもしれません。高層化は、今のところ子どもたちにとって、地域の発展とか、プライドの象徴みたいになっているところがあります。だから、高い建物を必死になって撮ってきます。自分もそういうことが、1つの街の誇りとしてとらえられていくのではないのでしょうか。やる価値はあると思いますが、あまり差が出なくて、がっかりするためにやるのではないかという気がします。

萩原礼子（結まちづくり計画室）：お年寄りに撮ってもらった写真を、昔のアルバムなどを見ながら比べて、場所性について考察するという話で、より積極的にまちづくりに活用する方法もあるのではと思いました。イギリスのノッチングベール・アーバンスタディ・センターは、失業率が高くてすさんだ街のセンターですが、若者にすさんだ気持を表現するような写真、街の風景を撮らせることによって、逆に能動的に街を転換していこうということを狙っていました。ロックンロールで自分のすさんだ気持を表現するのと同じように、何か変えていくことができるのではないか、内面的に使えるのではないかと考えたのです。

野田：写真というのは、非常に多くの情報を写しとって、本人が写した意図以上のものを情報として提供します。プロジェクションとしてもものを見るということ、それを1つの会話のメディアとして使っていく、精神療法的な意味で使っていくという、そのバリエーションはあると思うのです。だから、お年寄りの方に撮ってもらうと、地域が、街がこんなに変わることが疲れる、ということも多くの人に訴えるのです。そういった言葉を引き出していくというのは、1つの会話の手段としての写真なんです。両方使われるといいと思うのです。

宗方 淳（東京大学）：写真投影法を用いたことがあるのですが、映像化しにくいものは、この手法においてはどのように扱われるのでしょうか。

矢野 恵子（毎日の生活研究所）：嫌いなものを撮るといふ指示はなさらないのですか。嫌いなものは撮らせないのに理由があったらその理由を、嫌いなものをも撮ってもらったら、どのようなものが各々の子どもの写真に現れると思いますか。もう1つ、パソコン通信についてどのような良さと、どのような害があると考えますか。これは新しいコミュニケーションを作れるかどうか聞かせてください。

中村咲野（地域総合計画研究所）：この写真投影法により、大人の心の世界ものぞけるのだろうか。先入観や、いわゆる知識によってその心の世界を解読するのは難しそうだ。

嵯峨創平（日本地域開発センター）：テレビ番組の影響、流行のドラマなどは、写真の影像に現れますか。

野田：1人の人間の内面を、何らかの投影法で調べようと思ったら、写真を使うよりも、やはり心理テスト的な方法のほうが良いと思うのです。僕が写真をやったのは、1地域の、集団としての子どもたちがその環境の中でどう生きているだろうか、ということをもとに網をかぶせる手法です。今おっしゃったように、具体的に、撮ってきた写真について、インタビューをしたりしてやっていくのは大変面白いと思うのです。ただ、実際にそれをやると、調査はなかなか終わりませんね。そういう



形で10人なりをきちっとやってみるということも良いと思います。聞かないと決めて分析を試してみたいわけですが、ただ、分析を加えた上で、また集まるチャンスがあって、ディスカッションができると面白いですね。「僕はこう読んだんだけど、どうだ」というふうにやってみる。実際は聞いたから正確に答えてくれているわけではないのです。正確性というよりも、自分が読んだものを通して、その子たちと会話を成り立たせるとするのが好きです。

嫌いなものということですが、それは皆さんご自由ですから、嫌いなものに関心があればやってください。それも面白いと思います。

大人のことで、やはり小さい子どもで写真が撮れるようになった子どもの写真が、僕が見ている限りはやはり面白いですね。小学校の真ん中ぐらいの子どもたちが撮っている写真が、大変生き生きして面白いです。上にいくにしたがって、どう読まれるかがわかっていますから、だんだん自分の部屋のものなんかは撮ってこなくなります。その構えの問題があることを一応考慮してやるなら、それはそれでいいと思います。

言い忘れたのですが、時間の経過を入れると大変面白いと思います。その人でなくてもいいのですが、その地域がそこに生きている人間にとってどう変わっていくか、ということをも写真で描いていくと面白いと思います。例えば、新興の住宅を10年かけて、どんなに熟していくかとか、そういったことが影像で表せたら面白いと思います。特に、今は社会変化が大きい時代ですから、いくつかの文化を設定して、写真を撮り続けてもらえたら、物質文化と社会変化のかかわりとか、揺り返しとしての原理主義の動きが、どういうふうにも生活の中で表現されるかとか、面白い影像が出てくるのではないかと考えております。

流行の影響は、同じ年齢層に限定しておいて、1地域を何回かやれば出てくるかもしれません。これまではしたことがありません。

三田村泉（啓明学園中学校）：私の学校の生徒を見る限り、大勢が外で遊んでいますし、友達とのかかわりをもとても重視しているように思う。確かに遊びの変化、遊び場の減少により、写真は貧困なものとなるでしょうが、それが内面にまで影響しているかは疑問に思います。

安藤康史（草土文化出版部）：中近東のイエメンで大学生を対象に写真投影法的な調査をする予定です。まことにこちらの関心はあるのですが、どのような指示を出したらいいか迷っています。

野田：自分は都市計画だから、好きな道を撮ってこいとか、限定すればするほど情報として面白くなっていく傾向があります。限定しないほうが、僕はいいと思います。数は、多いにこしたことはないですが、30人から40人ぐらいが撮ってくれたら、かなりのことはわかります。その地域の人々が、どんな目で環境を生きているかという感じがわかります。これは僕の印象で、きちんと分析して数を割り出したものではありません。

「よく遊んでいますよ」という話がありましたが、今の子は学校の遊び場では、それなりに上手に遊んでいるのです。しかし、子どもと子どもが自己主張をし合ったり、相手を理解したり、そのインターアクションが非常に減っていると思います。これは、大体の調査が全部いっていることです。私も70年代の後半以降、感情の深さを失って、知識情報人間化している、ということはずっと言い続けてきましたが、大体の流れはそうじゃないでしょうか。例えば、昨年、博報堂の生活総合研究所がすごいお金を使って、都内の2,000人ぐらいの10代後半の若者にアンケート調査をしたのです。質問項目500項目ですが、自然体で良い子、低温で囲い込みで無性化というふうになっています。自然体というのは、ほどほどに無理をしない。人と対立しそうなになればなるべく避ける。親に反発することは恥ずかしい。率直で自分の将来は明るい、以上が自然体です。良い子というのは、率直で自分の将来は明るいと思っているわけです。低温というのは、人の付き合いはさっぱりしており、過程はともあれ結果が大切だと考える。業績アップのためには、賄賂も仕方がないと、若者3人のうち1人は○を付ける。また、多くの人間関係より、気の合った友達が少しいればいいと

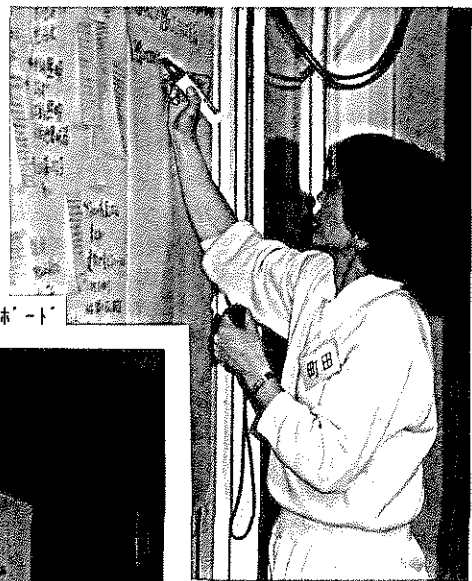


いう囲い込みの傾向がある。そして男女の区別を好まない無性化ということ。自然体、良い子、低温、囲い込み、無性化という表現をしています。表現は違うと思いますが、人と深いかかわりをして、その中で対立を起したり、好きになったりして、また距離をとってという、いくつかインターアクションの失敗をしながら人間関係を作っていく、ということは嫌いなのです。そうではなくて、1つの付き合い方のルールを学習しておい

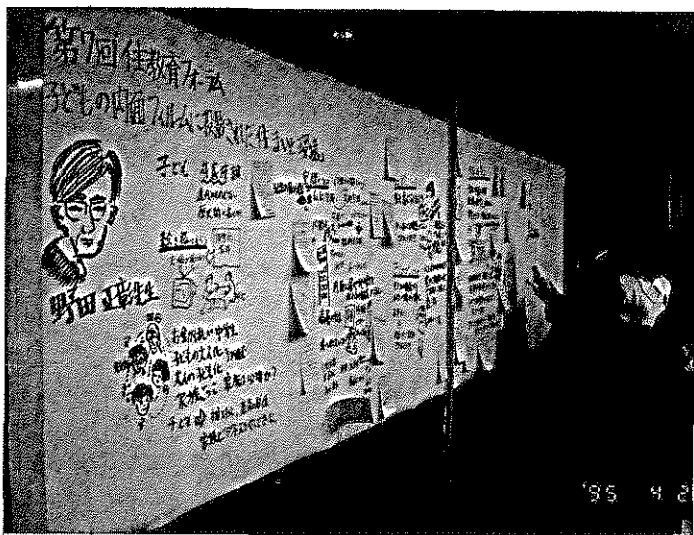
て、そこから距離を近づけない対応をする傾向が非常に強い。そのための付き合いのマニュアルとかルールを、早く身につけよう、知らない所に行くと、必死になってそれを身に付けようという傾向があります。それは、例えば馬鹿げた血液型性格判断なんかが流行する傾向でもあります。あんなのは何の意味もないのですが、A型はどうだ、O型はどうだという知識を入れておいて、相手の血液型を聞いて、それで決めつけをして、知っている知識の中でちょっと微調整をしてわかったつもりになる。個々の人間をちゃんと知ろうとか、自分をちゃんと表現するというのではなくて、非常に安易なフィルターを透して人との距離をとろうとする傾向とか、そういう面が強いと思います。

飯嶋史恵（東洋大学）：大人の方たちに関してはどうなのだろうか。子どもたちが悔いようのない現在の空間を作っているのは大人である。今の子どもという形容が存在している以上、昔の子どもがあるわけで、昔子どもだった人たちは、現在の空間をどう内面に取り入れているのか、あるいはどのように順応しているのか。

野田：子どものことをいろいろ話すと、みんな生き生きと話をされます。それに良い面と悪い面とがあるように思います。子どもの環境を良くしていくということは、大変良い面ですが、例えばちょっと出産率が下がると、わあっと「けしからん」云々と言って子どものことに関心を持つ風潮もあります。後者の面に表れているのは、自分の時間を自分の同世代の人と、生き生きと生きていないということの表れのように思います。つまり、日本の社会の大人たちも、生き急いでいて、子どもも国家とか社会の継承者としてもものを見ているところがあります。つまり、自分が主体でこの人生を生きているというよりも、社会の1つの歯車とか、作る人間として考え、生きていて、次の世代にもそれを見ている。やはり自分の人生を十分に生きてないということと、次の世代にこだわるといことは、つながっているように思います。だから僕は、子どものことに皆さんが関心を持つように、自分と同世代の人と豊かにかかわり合えるような、そういったことをいろいろ作っていくことと、子どもに関心を持つというのは、平行に考えていかなければいけないだろうと思います。日本の社会は、大人の男同士、女同士、あるいは異性間の交渉の非常に少ない社会を作っていると思います。そのことは結局、子どもも同じ状況にあるわけで、子どもだけが豊かに付き合いをするという発想は成り立たないだろうと思います。



▼木下・町田両委員が描き上げたフシリション・ボード



延藤先生のまとめ

非常に触発されることが多い一時でございました。今後に備えて2つ3つ課題をすくい上げてまとめに代えさせていただきます。

1つは、アクション・オリエンティッド・ラーニング（以下AOLと略）の背景とか論拠が非常に明確になった、ということです。かかわる人間が、周りの人間や環境と自由自在にかかわり、遊びながら自由な振る舞いを重ねていくうちに、ふっと人間の内部に気づきが起こって関心が高まって、その経験の積み重ねの中で、能動的に周りに対する意識や、あるいは振る舞いを広げていくという、そういう楽しい行動を積み重ねながら人の意識、住まいや環境に対する意識を開いていくということ、仮にAOLと、このフォーラムでは呼んでおりますが、その必要性の根拠が、非常に明確になったように思います。

この点については、前半で野田さんが整理されたことでありますが、家族の関係において、家族ビジネス化が進行しているというふうに言われたように、人と人の関係が切れ切れになっている。空間の面でも、極めて硬質な、閉鎖化した、そしてどこへ行っても同じ、均質な空間がはびこり過ぎている。時間という点でも、非常に管理された、いわば切れ切れの時間の中で子どもたちは、子どもサービスの市場経済制の中に巻き込まれているという、いわば現代社会を取り巻く人間空間、時間の深い問題の構造の中に、今日の課題が仕組まれていることが非常に鮮明になっていったように思います。

本当に深刻な状況の中で、他者とのかかわりに喜びを見い出すような人間や、あるいは開かれた空間、時間を仕組んでいくということは、果たして可能なのだろうか。周りに開かれたまなざしを持って、ポジティブに生きる子どもや人間が、どう高まっていけるのだろうか。そういうことについて、AOLの可能性を高めるためのキーワードが、議論の合間に3つぐらい隠されていたのではないかと思います。

1つは、主(あるじ)制度といったこと。人間がまるで電子の粒のごとき状態に、自らを認識したり、空間を認識したりしている状況、あるいは非常に管理強化の時間、管理仕組みの下に、1人1人が物象化されている中で、どう主人公になっていくか。1人1人が主になっていくか。そういう意味で私性と主性は基本的に違うのではないかと。私というのは、どちらかというと所有とか占有という意味合いが強いものに対して、主というのはむしろその場所、その時を最も最適に利用するという意味をはらんでいるし、あるいは自由ではあるけれども責任を持つという意味合いをはらんでいるようにも思います。私、あるいは所有するというのは、他者を排除するという意味をはらんでいるのに対して、主というのはたゆまず周りの人々を巻き込む、招き入れる、そのことによって、私とあなたとの豊かなインターアクション、相互作用が膨らんでいく。そういう主という、個人と集団というものを、子どもの世界や大人の世界にどう広げていけるのか。主空間と主人間をどう増やすこ

とができるのだろうか、という問いかけが議論の合間に響いていたように思います。

第2に、中間性とか曖昧性というキーワードです。非常に公共的、あるいは私的な空間あるいは時間も、人間も非常に切れ切れ、あるいは分断された状況にある。むしろ、その状況に応じてアドフォックに、最適な関係を1人1人が見出していく、発見をしていく、そのことに感動していくという、道草とか、さまようとかいうことが、それに当たるのだろうと思うのですが、具体的な道草とか、さまようということだけではなくて、メタファとしての道草、メタファとしての彷徨とか、メタファとしての漂流ということが、実は今の非常に硬直した状況を解きほぐしていくときのキーワードになるのではないかと思います。中間性とか曖昧性とかいうことの、深い意味を探り当てていくことを、もう少し重ねてみる必要があるな、という気がいたしました。

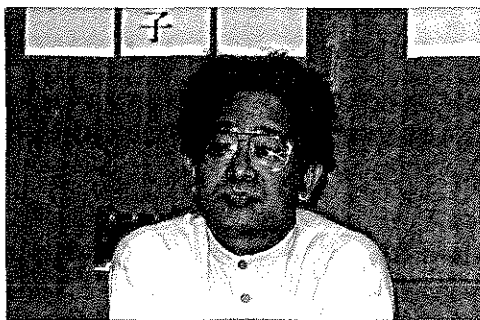
今1つのキーワードは、物語性というものではないか。切れ切れの状況の中に、実はある関係を発見できるとか、あるいは創造力を持って、間に何かを見出すことができる。無意味なもの、無関係なものの中に、つなぎ止められるような意味を見出していく。そういう意味では、まさにそういった物語性を構築できるような創造力の世界を、人間の内側にどう高めることができるのか。遊び心を持った、いろんな楽しい経験の世界が、創造力に火をつけるチャンスを生み出してくれるのではないかと。物語性のある空間を、どうデザインするかという課題とともに、物語を自由に紡ぎ出せるような人間主体をどう育ていけるのか、この2つの往還の関係をどう読み込んでいけるのか、ということも問われていたように思います。

最後に、全体の議論の中で、特に皆さんの関心と呼んでいたのは、写真の活かし方およびその位置づけの議論だったと思います。とりわけ写真投影法の位置づけは、

いわば子どもと環境の関係性を問い直す分析手法として、極めてユニークであります。今日の議論は、分析の方法について精緻に深めていくという議論とともに、今ひとつ単なる分析手法だけではなくて、むしろ地域における子どもと大人、あるいは被験者と研究者、地域の住民と専門家の対話の道具立てとして、コミュニケーション・ツールとして、写真投影法が使えるのではないかと。むしろ能動的な、街の良さとか問題点

も含めて、街をより良くしていくためのメディアとしての写真投影法という位置づけが、新しく出ていたように思います。

分析の対象として子どもをとらえるというよりも、むしろ子ども自身が状況を変えていく。大人がこういう状況を作ったがゆえに、大人がまずはこの状況を変えるために、機会あるごとにいろんなアクションを起こしていく必要はあるわけですが、子どももそういったアクチュアルな状況の中に参加していく、メディアとしてのカメラとか写真投影法、そういう開かれた参加のまちづくり手法の1コマという、そういう位置づけも今日の議論の中では出てきていたように思います。

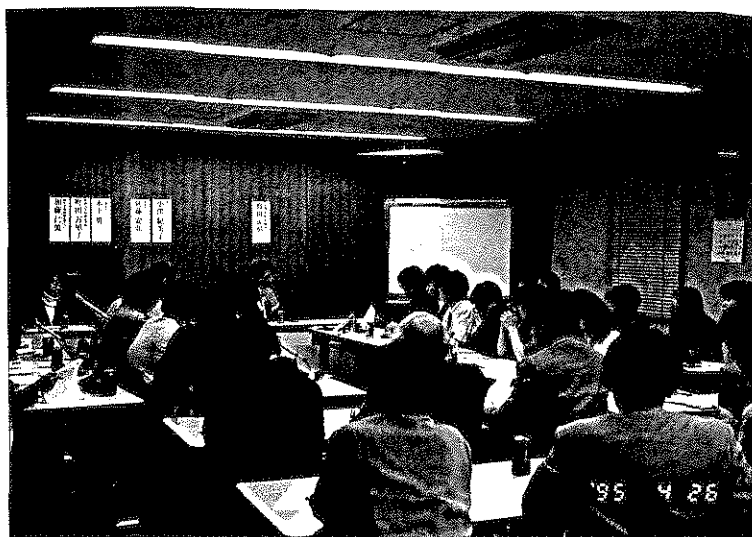


第7回 住教育フォーラムの記録

主催 (財)住宅総合研究財団

テーマ 子どもの内面フィルムに投影された住まいと環境

- ・日時 1995年4月26日(水)午後6～9時
- ・会場 当財団会議室
- ・講演 京都造形芸術大学教授 野田正彰 氏
- ・コーディネーター 熊本大学工学部教授 住総研住教育委員会委員長 延藤 安弘
- " 東京学芸大学教育学部教授 住総研住教育委員会委員 小澤 紀美子
- ・ファシリテーター 千葉大学園芸学部助手 " 木下 勇
- " 筑波大学付属小学校教諭 " 町田 万里子
- ・記録 跡見学園短期大学家政科専任講師 " 加藤 仁美
- 参加者 建築系・教育系などの研究者・実務者、並びに大学院生・学生、
まちづくりなどの活動家、関心のある主婦の方など44名



- ・この「住・まちづくりフォーラムかわら版」は、住教育フォーラムの開催記録を仮にまとめたものです。将来、何回かのフォーラムの成果と、各委員の皆さんによる研究論文を合わせて、書籍として刊行する予定ですので、ご期待下さい。
- ・次回フォーラムの予告は、詳細が決まり次第、案内状を郵送いたします。

住・まちづくりフォーラムかわら版(仮題) 7
1995年6月2日発行(非売品)

発行人 大坪 昭
発行所 財団法人 住宅総合研究財団
〒156 東京都世田谷区船橋4-29-8
電話:03-3484-5381 FAX:03-3484-5794
事務局 間宮 昭朗、小菅 寿美子、平井 なか
・表紙デザイン、裏表紙カット=町田万里子
・編集・文責=事務局

